

西域史上の新研究

白鳥庫吉

第二 大月氏考 (第三回)

余輩は昨年本誌に掲載せる康居考及び大月氏考に於いて、大月氏國の北境并に其東北部に據れる五翕侯の方域を推定したれば、是より更に此の國の東界に就いて論證する所あらんとす。さて大月氏の東方に於ける自然の境界が葱嶺なるべきは、何人も想像し得る所なれど、此の山岳は縦横百四五十里に亘れる高原地なれば、大月氏の領土は果してこの中何れの處まで延長せしかを究むる必要あり。余輩が此問題を考究するに方りて使用したる材料は、主として漢代より唐代に亘る歴代正史の西域傳并に佛徒の紀行文なるが、就中大月氏に關する直接の記載を擧げたるものは、實に漢書の西域傳なりとす。此の傳の云ふ所によれば、大月氏の東方に位するを休循無雷難兜の三國となす。而して是等三國の方位に關しては、未だ研究の足らざるものあれば、爰に是等并にその傍近の諸國の境域を闡明し、以て間

接に大月氏の東界線を髣髴せしめんと欲す。

休循國に關しては漢書^{十卷}西域傳に休循國王治烏飛谷、在葱嶺西去長安萬二百一十里、戶三百五十八、口千三十、勝兵四百八十人、東至都護治所三千一百二十一里、至捐毒衍敦谷二百六十里、西北至大宛九百二十里、西至大月氏千六百一十里、民俗衣服類烏孫、因畜隨水草、本故塞種也とありて、其の大月氏の東方に位すること、殆ど疑なきに似たり。されども漢書の記せる里數は常に信據すべきにあらざるを以て、たゞ此の文面のみに徴すれば、休循の方位は尙ほ頗る漠然たるものあり。因て更に此國と最も接近せる捐毒國に就いて漢書の記す所を検するに、捐毒國王治衍敦谷、去長安九千八百六十里、戶三百八十、口千一百、勝兵五百人、東至都護治所二千八百六十一里、東至疏勒、南與葱嶺屬、無人民、西上葱嶺則休循也、西北至大宛千三十里、北與烏孫接、衣服類烏孫、隨水草、依葱嶺本塞種也と見えたり。然るに又此の文のみにては齊しく休循の方位を定むる能はざれども、水經注河水二の條に、河水重源有三、非惟二也、一源西出身毒之國葱嶺之上とあるによりて、捐毒休循二國の位置は始めて推測せらるべし。蓋し身毒は通常印度の別稱たりと雖も、水經注の身毒は印度を指したるにはあらずして、其の著者酈道元は漢書の捐毒を印度の一稱たる身毒なりと誤解したるなり。想ふに此の誤解は獨り酈道元のみに限るべからず、唐代の碩學顏師古の如きも、亦同様の誤謬を冒せるにや、漢書西域傳無雷國の條なる捐毒に注して、捐毒即身毒天篤也、本皆一名、語有輕重耳といへり。而してそは宛も同氏が張騫傳に見えたる塞種に注して、塞西域國名、即佛經所謂釋種者、塞釋

聲相近、本一姓といへるが如く、塞を釋と誤り、捐毒を身毒と誤れるは、畢竟音聲の類似に拘泥したるがためならむも、然かも偶然、捐毒の塞種なりしは、亦適、顏氏の誤解を致し、一原因なりしなるべし。尤も漢土に於いても、水經注の此の誤謬に注意せしものなきにあらず。例へば禹貢錐指の著者が此の身毒は捐毒に作るべしといへるが如き、又徐松が漢書西域傳補注に、捐毒在葱嶺東、爲今布魯特、身毒在南山南、爲五印度地、二國遠絕、顏君比而同之、斯爲誤矣、水經注亦誤以身毒爲捐毒といへるが如き即ち是なり。

さて水經注の身毒が愈、捐毒なるに相違なく、而して捐毒が河水の源頭に據れりとせば、此の國の方位を探索すべき好個の鍵鑰は、茲に始めて得られたるなり。但し河水に于闐河、葱嶺南北兩河の三源ありて、水經注は捐毒國に發する河流の名を擧げざれど、此の河源が葱嶺北河即ち Kashgar 河なるべきは、水經注及漢書の文面によりて自ら推測せらるべきなり。されば往年三宅博士が、歴史と地理雜誌に於て、捐毒國を Kashgar 河の上流 Kizilsu の流域に擬せしは、正當なる見解なりと謂はざるべからず。然れども此河流の灌漑する地域は頗る廣大にして、捐毒國は固りその全流域に亘れりと思はれざれば、其何れの方面に據れるかは、次に考究すべき問題なり。露國の東洋學者 Grigorjew 氏は、此國を Kashgar 河の支流 Avakmen 河の上流域 Aiai 高原の東方に置む (Wostochnii ili Kitaiski Turkestan. pp. 36-37)。Grenard 氏は之を Kizilsu 河の上源に位する Ungent に當てたり (Mission scientifique dans Haute Asie 1890-1895. p. 61)。此等の推測は何れも中らずと雖も、遠らざる方位を示せるものなれども、其理由を具せざれば、専ら

之に信頼するを得ず。余輩が漢代に於ける西域の地理を研究して得たる考察の結果によれば、當時漢人に知られたる西域の邦國は、大概東西交通の要衝、若くはその附近に當れるものに限られたるが如し。されば漢書西域傳に見えたる國名は、決して當時存立せし全部若くは過半を包容したるものに非ずして、實は往來の孔道に當れるものを列擧せるに過ぎざるべし。今の此見解を以て捐毒國の方位を案ずるに、此國たる必ず Kizil su 流域に於ける交通の要區を占め、且つ游牧に適したる處ならざるべからず。漢書の西域傳によれば、當時玉門關より西域に通ずるに二道あり。一は鄯善 (Toh-hor) より南山脈に沿うて西、莎車 (Yarkand) に至るを南道とし、此處より西、葱嶺を踰ゆれば、即ち大宛 (Bergana) 康居 (Kirghiz Kasak) に出づ。捐毒國が疏勒 (Kashgar) より大宛 (Bergana) に通ずる山道の要衝に位せしは、明かなれば、Kizil su 河の發源地 Irkistan を以て此の國に擬するを至當とすべし。蓋し Irkistan の地たる、Fergana 方面より Osh を經て、Terek 峠を越えて Kashgar に至るも、又 Balkh の方面より Alai の高原に上り、Tann Mourun 峠を踰えて Kashgar に至るものも、共に必ず經由せらるべからざる處にして、換言すれば、Osh-Kashgar 道と Balkh-Kashgar 道との交會する要樞に位す。Kuropaktin 氏の言によれば、此地は露國の税關所が設置せられざりし以前より、既に樞要の地點を爲し、Kashgar 方面より來る旅客が Terek 峠を踰えんとするときは、常に此處に宿泊して旅裝の準備をなす。Kizil su 河の下流域に位す

る支那の城寨を除きては、Irkistan は Gulistan-Kashgar 間の孔道に於いて定住の人民を有する唯一の地點にして、而も此間に於ける最も著名なる宿驛なりと (Kashgaria, p. 32)。又 Stein 氏の踏査せる所によれば、Irkistan は Farghāna 及び Alai 二大交通路の會合點にして、Alai 衝道を行きて Tann Murun 峠を下れば、直に至るの處に在り。現今此地は城壘の存在とコサク兵の屯駐との故を以て有名なれど、而もその形勝の要區たる所以は、全く上に記せる二大交通路の交叉點たるにあり。この地は海拔九千五百露尺の高所に位すれども、山河の形勢は自らこの豁谷を擁護し、寒氣従つて峻烈ならず、又西北二方の山間より流下する涸流の土地を灌溉するものなれば、牧畜を營み又燃料を求むるに自ら便宜を有し、此處より以來 Kashgar に至る道路が多く岩石沙礫の不毛地たるの比にあらずといへり (Ancient Khotan, p. 55)。余輩は此等の卓越せる探檢家の提供せる材料によりて、漢書の捐毒國を以つて今の Irkistan に擬せんと欲す。而して此の考察の誤らざるは、またこれによりて漢書の文面がよく釋解せらるるにても證明せらるべし。即ち文中に「西上則休循」とあるは、Tann Murun 峠を上りて Alai の高原に出づるをいへるなり。又 Kizilsu 河の豁谷は深く葱嶺の東腹に斗入するが故に、捐毒國の南境が葱嶺に接するは自然の形勢なれば、文中に「南與葱嶺屬」とある趣もよく了解せらるべし。また漢書が西域傳に記せる里數に誤算多くして、悉くは信據するに足らざれど、往來の頻繁なる要道に與へたるものに於いては、多く正確を失はざるものあれば、一概に之を擯斥し去るべきにあらず。漢書は疏勒より捐毒に至る里數を明記せざれど、疏勒は都

護の治所即ち烏壘を去ること二千二百十里にして、捐毒は二千八百六十一里なれば、その差たる六百五十一里は實に兩國の距離と見らるべし。而して Grenard 氏の測定する所によれば、Kashgar より Irkestan に至る距離は二百二十八吉米突即ち約五十五里なり。果して然りとせば、里數の點より之を見るも、また捐毒を以て今の Irkestan となす余輩の考察にさしたる支障なきを悟るべし。

捐毒國が愈々 Irkestan なるに一決せば、其隣國休循の位置を推定するは、甚だ容易なり。漢書の云ふ所によれば、捐毒の西葱嶺を上れば、則ち休循にして、其間僅に二百六十一里に過ぎずとあれば、此國が Tam Murum 峠を以て捐毒と相接し、Alai 高原に位すべきは勿論なり。然れども、此の高原は東西百三四十吉米突に亘るが故に、休循の疆域が果してその全部を包容したりや否やは不明なれども、漢書に示されたる休循國は、捐毒國の場合に於けるが如く、亦此の高原に於ける樞要なる地點に位せしなるべし。今試に此の用意を以て地圖を案ずるに、Dschipchik 或はその附近こそ休循國に該當すべき處ならめ。此の地は Kashgar-Alai 道が Fergana 方面より來る Tallik, Dschipchik, Saril-Mogal 三道と會合する處にして、而も Irkestan を距ること大約百吉米突即ち我が二十五里なれば、休循と捐毒との距離を二百六十一里となす漢書の文面とも吻合す。

三宅博士が休循國を Gutia に當てたる理由を察するに、第一には休循と Gutia と音聲の類似せること、第二には此國が Irkestan より (Tarak) 峠を経て Osh に達する大道に當るべしと假

定したるが故なるべし。然れども *Gulica* の地たる、溪流の上源域に位する山地にして、形勢上無論大宛國の領土に屬すべきものなるのみならず、若しもこれを一國と見るときは、此國の西は即ち大宛にして、漢書の記すが如く、大月氏にあらざるとなるべし。是れ余輩が此説に賛同すること能はざる所以なり。又 *Chavannes* 氏は捐毒を *Karategin*、休循を *Irkeslam* に當てたれど、此考定の誤れるは勿論なり (*Les pays d'occidentaux d'après le Wei-ho, T'oung-pao, vol. 6, p. 655, note 3, 4*)。然れども同氏が漢書によりて考定したる次第を讀下するに、捐毒は *Kashgar* の西葱嶺の北側に位すとあれば、今の *Karategin* なるべし。又休循は大宛即ち *Tra-tupe* の東南千三百里に位し、捐毒の東 *Kashgar* の西に在りと見ゆれば、恐くは *Osh-Kashgar* 道に當る *Irkeslam* ならんと云はれたり。是れ明に同氏は捐毒と休循とを錯誤したるなり。若しも同氏にして今少しく漢書の文を注意して讀みたらんには、必ずや捐毒を *Irkeslam*、休循を *Karategin* に擬せしなるべし。果して然りとせば、捐毒の方位に於いては、余輩と全然意見を同じうすることゝなれど、休循の所在に關しては、余輩と見解を異にするなり。同氏が捐毒を正しく *Irkeslam* の地に當てたるにも拘らず、休循を *Karategin* の如き遠方に置きたる理由を察するに、蓋し氏は漢書に「休循在葱嶺西」とある文を誤解したるが故なるべし。此の處に擧げたる葱嶺は *Kizil su* と *Surkhāb* の二流域を分割する *Tann Murun* の分水嶺を指したるものにて、*Pamir* の高原をいへるものにあらず。故に漢書の捐毒の條に「西上葱嶺則休循」とある文面によりても、休循が *Pamir* の高原に位するを知るべきのみならず、又捐毒と休循とが相距ること僅

に二百六十一里なるにても察せらるべし。然るに Chavannes 氏は此處の葱嶺を Panir の高原殊に Alai の高原と解したればにや、休循をその西北側に位する Karategin に擬して之を疑はざりしなり。然れども休循をかく遠方に置くときは、第一漢書が捐毒即ち Ikhistan より休循に達するに與へたる里數と吻合せざるのみならず、休循は西北大宛に至るとある文面にも牴觸す。尤も氏は大宛の都を Richthofen 氏と同じく、今の Ura-tupe に擬したれば、休循を Karategin に置さても毫も支障を感じざりしならんが、貴山城が Ura-tupe にもあらず、Khojend にもあらずして、今の Kasan なることは、余輩が前號に於いて考定したる如くなれば、休循を Karategin とせば、漢書に「休循西北至大宛」とある文面と合はざるべし。又三國志^{卷三}烏丸鮮卑東夷傳の末尾に附したる魏略の文によるときは、捐毒休修^{休循}は楨中・莎車・渴石渠沙・西夜依耐滿犂億若榆令琴の諸國と共に疏勒即ち Kusigur の屬國たり。而して此等の國は何れも葱嶺の東側に據れること後段に説かんが如くなれば、休循國の一國のみが葱嶺の西北側に位せりとしては、疏勒の國力に鑑みて實際に合はざる嫌あり。是れ余輩が休循を以て Karategin とす説に賛成すること能はざる所以なり。又 Franke 氏は漢書が捐毒休循二國に就いて記載せる文面を案じて、此二國を天山山脈の西南部、Narin 河の南支流域に放牧せし塞種となし、休循は捐毒よりも大宛に接近したる處なりとせり。此考定は現代の學者が提出したるものゝ中に於いて、最も正鵠を失したるものなり。(Zur Kenntnis des Türkvenker und Skythen Zentralasiens, pp. 50—51). Narin 河の流域は既に康居考の條下に於いて考證を経たる

が如く、烏孫の都赤谷城の存在せる所にして、此地方は殆ど烏孫の領土と見做すべきも、捐毒・休循の如き塞國の據るべき地にあらず。若しも此の二國が此の地に據れりとせば、大宛及大月氏は共にその西南に位し、漢書が大宛を此の二國の西北に在りとし、大月氏を休循の西に在りとす文面に合はざるべし。氏はまた唐書^{卷二百一、上}の西域傳寧遠即ち拔汗那(Fergana)の條に「顯慶三年以渴塞城休循都督とある文によりて、七世紀の頃休循國は Fergana の全部或はその一部分を占領して威力を振ひしものなり」と推斷せり。然れども唐代の設置に係る四裔の州都督府の名稱は、當時の史官が漢代の名稱を漫然取り來れるものなれば、歴史地理を研究する材料として、何等の價值を有するものにあらず。例へば大秦州を叡密城に置き、犂軒州を據瑟部落に置きたるなどを見ても之を知るべし。

以上述べ來れる如く、捐毒・休循二國の方位に關して從來學者の考定したるものには、未だ服従すること能はざるが故に、余輩は自己の考察を以て正鵠を失はざるものと信じ、捐毒を Toksan, 休循を Alai 高原なりと斷定せんと欲す。尤も漢書が休循國として後世に示したるは、Alai 高原の東半部なるがごとくに見ゆれど、山河の形勢自から一區劃をなしたる此の高原に、また別に一國を有せりと思はれざれば、此の全域を以つて休循國と爲すを穩當とすべし。果して然りとせば、大月氏の東北境は Karategin の地を以て休循國と土壤と接せしとなすべきなり。

休循捐毒の南方に位する葱嶺中の國にして、大月氏の東境に接せしものを無雷國となす。

この國は漢書^{卷九}の西域傳に、無雷國王治廬城、去長安九千九百九十五里、戶千、口七千、勝兵三千人、東北至都護治所二千四百六十五里、南至蒲犂五百四十里、南與烏秣北與捐毒、西與大月氏接、衣服類烏孫、俗與子合同と見えたり。さて捐毒の Irkeshtim、大月氏の Bactria なるは既知の事に屬すれど、此の二國より無雷國に至る里數を擧げざれば、未だ之を以て無雷國の方位を推定すること能はず。然し此の國の南方五百四十里に蒲犂國あり。試に漢書が蒲犂國に就いて記せる所を検するに、蒲犂國王治蒲犂谷、去長安九千五百五十里、戶六百五十、口五千、勝兵二千人、東北至都護治所五千三百九十六里、東至莎車五百四十里、北至疏勒五百五十里、南與西夜子合接、西至無雷五百四十里、侯都尉各一人、寄田莎車、種俗與子合同と見えたり。さて無雷國の條に蒲犂は無雷の南に在りと記せるに、此條に於いては蒲犂の西に無雷ありと爲す。思ふに蒲犂は無雷の東南に位せしなるべし。而して此の國は東莎車即ち Yarkand に至る五百四十里、西北無雷國に至る五百四十里なりといへば、無雷は東莎車を距ること千八十里なりと知るべし。而して莎車 (Yarkand) と無雷 (e) との中間に位する蒲犂 (e) の北五百五十里に疏勒 (Kashgar) ありといへば、無雷、莎車、疏勒を連結したるものは殆ど正三角形にして、蒲犂は頂點たる疏勒 (Kashgar) より垂下したる直線の底線と交叉する處に位すべきなり。正三角形の一邊をなす疏勒、莎車の方位は既知に屬するを以て、莎車 (Yarkand)、蒲犂、無雷を連結する底線の大體の方向が Yarkand 河と趨勢を均しうすることは推知するに難からず。而して此底線が那邊に位するかを一層明瞭ならしむるのは、後漢書^{卷八}の西域傳、莎車の條に見えた

る莎車西經蒲犂無雷至大月氏とある文なりとす。此文面によるときは無雷蒲犂の二國は莎車即ち Yarkand より Tashkurgan を經て大月氏或は罽賓に通ずる所謂葱嶺南道に當れるものなり。然れども Yarkand より Tashkurgan に至るに二道ありて Urtang yang Arigh, Dara Talshoz Torghak, Kazil Dawan, Darah Chaling を經つ Chihil-Gumbaz に出で更に Chichiklik 峠を越えて Taghar-mar を通り Tashkurgan に至るを北道とし又 Yarkand より Urtang Kosharab, Ozil Dur を過り Arpatal-lak 峠を驗えて Langar に出で Khandar の險嶺を度りて Vacha の縵谷を通り西北行して Tashkurgan に至るを南道とす (Yule, Papers connected with the Upper Oxus Regions, p. 466-467)。此の如く Yarkand より Tashkurgan に至るに南北二道あれば無雷蒲犂の二國は此の中何れの孔道に當れるか尙不明の裡にありと謂はざるべからず。然るに蒲犂國の條に南與西夜不合接とある文は此の國の位置を一層明確ならしむるものなり。試に西夜の條を案ずるに西夜王號子合王治呼隄谷去長安萬二百五十里戶三百五十口四千勝兵千人東北至都護治所五千四十六里東與皮山 (Guna) 西南與烏秣北與莎車 (Yarkand) 西與蒲犂接と見えたり。既に蒲犂の條に南は西夜子合に接すとありてこの條には西蒲犂に接すとあれば西夜子合は蒲犂の東方より南方にかけて延長せしならん。而してこの西夜子合は今の何れの地に當れりやと云ふに此の國は魏書北史の朱居朱居半朱駒波唐書の朱俱波朱俱槃宋雲の朱俱波玄奘の斫迦歷代三寶記の遮拘迦遮居迦にして從來漢土の學者には今の庫克雅爾 (Kule-Yar) と思はれしが Chavannes, Stein 二氏の考證によりて今の Karghalik に考定せられし地なり (Chavan-

nes, Voyage de Song yun, p. 397-8. Stein, Ancient Khotan, pp. 91-92. 堀氏解説西域記(九八八頁)。漢書の西夜子合が既に今の Karghalik なりとせばその西或は西北に方れる蒲犁國が Yarkand より Tashkurgan に通ずる南道に在りしは、殆ど亦疑を容れず。而して左に引用する水經注の文は、實に余輩の推測を證明するものなり。

河水自葱嶺分源東逕迦舍羅國釋氏西域記曰有國名伽舍羅遊此國狹小而總萬國之要道無不由城南有水東北流出羅遊西

山逕岐沙谷出谷分爲二水一水東流逕無雷國北又東流逕依耐國北河水又東逕蒲犁國北河水又東逕皮山國北。

此の文に見えたる河水が漢人の所謂葱嶺即ち Yarkand 河なるは、水經注の前後の文を讀んで直に了解せらるべし。此の河水の發源地は Sirkol なれば、その源頭に位する迦舍羅國が、此方面に在るべきは之を推知するに難からず。此の國は釋氏西域記の迦舍羅遊國と同名なるべければ、水經注に迦舍羅國とあるは遊の省から羅遊西山とあるは迦舍の略せられしにて、その完稱は迦舍羅遊國なり。釋氏西域記によれば、此の國狹小なれど、而も萬國の要道を總へ由らざるなしとすへば、此地が Yarkand の上源域たる Sirkol の豁谷を指し、その都城が Tashkurgan なること殆ど亦疑を容れず。南北朝時代より隋唐時代に亘りて、此國が渴槃陀漢盤陀、渴槃陀など稱せられしは、Pulo 之を唱道してより全く學界の定説となれり。魏書十卷西域傳を案するに、渴槃陀國在葱嶺東朱駒波(Karabhalik)西河經其東北流有高山夏積霜雪亦事佛道附於嚧嚧と記し、又洛陽伽藍記五卷に載せたる宋雲の紀行を見るに、自葱嶺步步漸高

如此四日乃得至嶺約中下實半天矣漢盤陀國正在山頂中略城東有孟津河東北流向沙勤(Kashgar)とありて渴槃陁漢盤陀を流るる河水が Yarkand 河なること甚だ明白なるに(Chavannes, Voyage de Song yun. p. 401)水經注の記せる迦舍羅逝國の河水が之と流るゝ方向を同じうするは益々此國の Tashkungan なるを證すべしなり。

魏書の渴槃陀は宋雲の漢盤陀と同名にて、この外唐書の渴槃陀漢陀渴館檀(説飯)玄奘の羯盤陀慧超の渴飯檀續高僧傳の羅盤陀等の諸譯あり。此等の譯名は既に學界に知られたるものなれど、魏の景明三年に屬賓朱居槃などと共に魏に朝貢せし國の中に訶盤陁と稱するあり。是れ明かに渴槃陀の異譯なれば、此國の譯名は更に一個を増加せり。Chavannes 氏は此等の譯名を綜合對照して、その原名は Karband 或は Garband ならんとすへり(Voyage de Song yun. p. 393. note 3. BEFFROY. II.)。然らば此名稱に如何なる意義あるか、之が解釋を試るも決して徒勞の業にあらざるべし。今日此の地方を Sarkol とすは黃谷の義、その都 Tashkungan は石城の義にて、何れも Turk 語なれど、此等の名稱は何れも後世 Turk 人が多く此地に移住するに及んで成りたるものなれば、今を以て古を律すべからず。此地方に據れる元來の土人が Iran 種なりしことは、學者の均しく試むる所なれば、南北朝時代より行はれたる渴槃陁の如きは、寧ろ Iran 語にて解釋するを至當とすべし。苟て Wakhan 語にては、岩石山を ghar, Yaghnob 語にては gor, Bactria 語にては gairi, Sanskrit 語にては giri, Afghan 語にては ghar とすひ、又 Sighnan 語にては gow, Bactria 語にては gairi, Sanskrit 語にては pand, Munji 語 Sanghici 語にては panda, Bactria 語にて

は *pañña* と *śū* (Tomaschek, *Centralasiatische Studien*, II, pp. 759-760) 渴槃陁の原名は *Garpandi*; 或は *Garpuda* にて山路、石道の義なるべし。今の *Tash-Kurgan* の名が既に *Türk* 語にて石城の義なるを思ひ、又西域記^二卷十 渴槃陁國の條に渴槃陁國周二千餘里、國大都城基大、石嶺背徒多河、^略中城東南三百餘里、至大石崖とあるによりて此國に岩石の多きを見れば、渴槃陁を石道、山路の義と解釋するも強ちに無稽の事にあらざるべし。宋雲の紀行に見えたる孟津河は、玄奘の西域記に記せる徒多河と同川にて、今の *Tarkand* 河なると論なし。孟津の名は他書に散見せざるに反して、徒多河の名は古より印度に知れ渡れりと覺しく、西域記の序文には、瞻部洲の中央に位する阿那婆答池より流出する、菟伽 (*Ganga*)、信度 (*Sind*)、縛耨 (*Wakhs*)、三河を叙し、更に徒多河の事に及び、池北面頗胝師子口流出、徒多河、繞池一週、入東北海、或曰潛流地下、出積石山、即徒多河之流爲中國之河源と記せり。玄奘以前には之を私陀と譯せりと見え、西域記に舊曰私陀訛といへり。翻譯名義集^{第七}諸水篇^{第十}に徒多の名を解して冷河となし、は正しき梵語の解釋なり。此の言にては寒冷を *śīta* と *śū* へば、徒多は其の對音なり。Sarikol に接近せる *Śighnan* 語にては寒冷を *śigh* と *śū* へば、*Tomaschek*, II, p. 754) 徒多はまたこの言の對音なりと思はれんが、渴槃陁に佛教の傳はりしことの上代にありしは、法顯の佛國記、玄奘の西域記などによりて之を知るべきのみならず、殊に西域記が此地方の名稱を多く梵語に附會したるを見れば、徒多河の如きも或は佛徒の命じたる雅名なりしやも知るべからず。Sarikol 語にては冷き寒きを *śīta*、寒冷を *śī* と *śū* へば、*Bactria* 語にては氷を *ī*, *Kafir* 語にては寒冷を *jos* と *śū* へば、*Toma-*

sohek. p. 754) 徒多河の土名は「ṣなりしならんか。此の如くに考察し來れば、宋雲の紀行に記されたる孟津河は或は孟津河の誤寫にてはあらざるなきか。孟孟二字の混同は實際あり得べき事にして、現に宋雲の一本に鉢孟とあるを、一本には之を鉢猛鉢孟に作れる適例あり。若しも此の考察の如くんば、孟津は正しくは孟津(Mentsin, Yentsin)にて、梵語譯と音聲の著しき類似あるを認めずんばならず。西域記によれば、羯盤陀城の東徒多河の流入する湖水を水池といふ。此湖水の名稱の如きも亦徒多河の名義と關係ありげに思はるれば、この河水の元來の土言は「ṣなりしを、佛教の傳來して梵語の盛に行はるゝに及び之を徒多(Ṭi)と改稱せるにあらざるなきか。又西域記によれば、羯盤陀國の東境に奔攘舍羅と云ふ處ありて、福舍の義なりといふ。梵語にて福徳を pūrṇa といひ、館舍を śāla といへば、奔攘舍羅は正しく梵語 pūrṇaśāla の對音なること西人既に之を説けり。

此の如く、渴槃陀國に關係ある名稱が梵語及び Iran 語にて解釋し得らるゝを見るときは、此國の別號なりと思はるゝ水經注及び釋氏西域記に記せる迦舍羅逝の名も亦此等の國語を以て解説するを穩當とすべし。梁書^{卷五十四}諸夷傳及び南史^{卷七十九}西域傳を案ずるに、渴槃陀國王の姓を葛沙氏といひ、梁の中大同元年即西曆五百二十九年に、使を梁に遣はして方物を献上せしことあり。因て思ふに迦舍羅逝の伽舍、或は伽逝は、梁書の葛沙と同語にして、元來は國王の姓なるべく、而して羅逝は別に一語なるべし。而して梵語にては王を rāja といへば、羅逝はこの言の對音にて、迦舍羅逝は迦舍王の義なるべし。尤も漢土にては梵語の rāja

を譯するに、多く曷羅闍の三字を使用す。例へば Radjagruha (王舍城を曷羅闍結利四、Radjapn-ra) (王城) を曷羅闍補羅 Radjavarddhana を遏邏闍伐彈那と譯するの類即ち是なり (Eitel, Hand-Book of Chinese Buddhism, p. 127)。此の如く梵語 radja を譯出するに、羅闍といはずして曷羅闍とすふは何故なるかといふに、漢人は蒙古 Turk 等の Uralatai 民族の如く、r 行を以て始まる語を發音するに困難を感ずるが故に、r 音の上に母音を加へて之を呼ぶ習慣あるが爲なり。故に梵語 radja を r 音に aradja と音ず、曷羅闍は正しく此の aradja の對音なり。Russia を俄羅斯 (Russ) とし、Ruua と Uruua とすふも、亦之と同様の呼稱なり。然れども時としてはまた梵語 radja を譯するに、此の音便法を採らずして直にこれを音譯することあり。例へば王舍城を羅闍城と譯せるの類是なり。而して迦舍羅逝の羅逝の如きは、これと同一の譯法に従へるものなり (Hirth, r 音の漢譯法參照)。

西域諸國の國號を案ずるに、帝王の姓を取て國名に代ふることあり。Partia の一名を安息 (Arsak) とす、Seldjuk-Turk の名を滅力沙 (Malek shah) といひしが如きは、その著しき例證なり (Hirth, China and Roman Orient)。葱嶺山中に據れる邦國が此種の國號を有せしことは、本問題に適切なる徵證を與ふるものなり。慧超の往五天竺國傳によれば、Chitral の上流域に於ける拘衛國の一稱を奢摩褐羅闍國といへり。此褐羅闍は他の曷羅闍と均しく梵語 radja の對音にて、王の義なれば奢摩褐羅闍國は奢摩王國といふに同じき呼稱なり (藤田氏、慧超往五天竺國傳箋釋)。又後漢書^{十八}の西域傳大月氏の條を案ずるに、月氏自此之後最爲富盛諸國

稱之皆曰貴霜王漢本其故號言大月氏云とあれば大月氏はまた自ら貴霜曷羅闐國(Kusan rād-
[註]と稱せしを知るべし。此の如く Tashkurgan の近傍より起れる邦國が國名或は王姓の下
に *radia* の語を附して國號となし、を以て之を觀れば、迦舍羅逝國の如きも亦其例を追へる
ものならん。

以上の論證によりて、水經注の迦舍羅逝國が愈、今の Tashkurgan なりとせば、其より以東に
位する無雷蒲犁の二國は論なく之を接近せる依耐西夜子合の如き氏羌諸國が Tashkurgan
より Yarkand に通ずる Yarkand 河の南を走る孔道に當れる者なるは、亦察するに難からず。此
沿道の山地に於いて邑落を爲すべし處は *Yashka* の全流域 *Bakam Darya* の下流域及び *Asgensai*
の全流域なるべけれど、此等の豁谷に前掲の諸國を配當せんと欲せば、特に考察する所な
らざるを得ず。さて此等氏羌諸族の中其の考證の結果既に確定せりと信ぜらるゝは子合
國なるが漢書の西域傳に於いては、子合と西夜との關係甚だ明瞭を缺くものあり。同傳西
夜國の條に「西夜國王號子合天」とある文面によれば、子合は西夜の號なるが如くなれど、同文
に「子合土地出玉石」とある文より察すれば、子合は國名なるが如し。又蒲犁國の條に「南與西
夜子合接」とあるによれば、西夜子合は一國とも思はれざるにあらねど、依耐國の條に「南與子
合接」とあるによれば、子合は別に一國を爲すものとも考ふるを得べし。此くの如く漢書の
西域傳にては、西夜子合は或は一國の如く、或は二國の如く、其關係甚だ漠然として、後世の歴
史家をしし殆ど判斷に苦ましむるものあり。然るに後漢書の西域傳に於いては、截然之を

區別して二國とせり。同書^{十卷}八西夜國の條に「西夜一名漂沙、去洛陽四千四百里、戶二千五百口、萬餘、勝兵三千、地生白草、有毒、同人煎以爲藥、傳箭鏃、所中即死、漢書中誤云、西夜子合是一國、今各自有王」とあるは、漢書に記されざる新事實にして、その人員、戶口を以て之を推せば、蓋し此の方面の氐羌諸族の中に於いて最も強盛なる國なりとす。翻てまた同書子合國の條を見るに「子合國居呼鞮谷、去疏勒千里、領戶三百五十、口四千、勝兵千人」とありて、その戶數、人員、及び住地に於いては、漢書が西夜の條に記せる所と吻合す。是によりて之を觀れば、西夜と子合とは自ら別國にして、漢書は何故か之を誤て一國の如くに書きなせるなり。而して子合國が西夜國の北或は西北に位せしことは、後漢書西域傳子寔の條に「自于寔(Khotan)經皮山(Gu-ban)至西夜子合德若高」と見えたる如く、南より北に次第して記載せられたる文面によりして察せらる。又子合が西夜より西方或は西北方に位せしことは、漢書烏秬國の條に「北與子合蒲犁接」といひ、依耐國の條に「南與子合接」と見えたるによりても推測せらるべし。果して然らば漢代の西夜子合は何れの處に之を求むべきか。後漢書の記す所によれば、西夜は人口萬餘を有する大國にして、山間の豁谷に據れる貧弱國とは思はれざれば、蓋し今のKargha-三なるべく、子合は呼鞮谷に據れる小國なれば、Karghaikの西に當るAgansaiの流域に擬すべし。而して漢書に子合國に玉石を出すといへる記事は、適、余輩の推測を確證するものなり。和闐は古より玉の產地として著名なるが、近代に至りて更に玉の產出を以て稱せられたるは、葱嶺中の密爾岱山とす。此の玉山はMindaiの名を以て早くも西人の間に知れ渡り

たるが、其所在に至りては、未だ明瞭ならざりしと見え、*Hedin* 氏の如きもその方位を知るなしと云へり (*Ancient Khotan*, p. 44)。然るに西域水道記^{一巻}澤普勒善河の條下に、此山の事を記すと頗る詳細にして、殊に *Yarkand* より彼處に至る道程を示し、密爾岱舊作關勒自葉爾羌城南七十里、至坡斯恰木、又西南五十里、至汗亮格爾、又西南百五十里、至英額莊、又西南三十里、至齊盤山、又西南五十里、至阿子汗薩爾、又西南六十里、至密爾岱山といへり。さて此文中に見えたる坡斯恰木は *Pogam-basar* にして、阿子汗薩爾は *Asgansal* なれば、此處より西南六十清里に位する密爾岱山は、必ずや *Asgansal* 河發源の山岳にして *Sandal Dawan* の山脈中に在るべし。*Hedin* 及び *Grenardt* 二氏の地圖には、特に *Nephite* 即ち玉の產地として之を標示せり。尤も *Hedin* 氏の地圖によれば、玉脈は密爾岱山を中心として東西に亘れりと見え、*Sandal 峠* の西 *Burungsal* の南及び *Sandal 峠* の東北 *Isnab* 河の上流域たる *Uingazi Dawan* の東南にも玉の產地あり。然れば子合國に玉石を出すといふ記事は、必しも此國を以て *Asgansal* の流域なりと決定すべき確證となすべしにあらねど、他の理由によりて既に此流域に擬定せらるべき子合國に玉を産するは、適此考定を強むる傍證と爲すべきなり。後漢書は子合と西夜とを二國として記載せるにも拘はらず、三國志^{十卷}三鳥丸鮮卑東夷傳の末尾に引用せる魏書の西域傳には、悉居半國故西夜國也、一名子合、其王號子、治呼隄谷、在于闐西、去代萬二千九百七十里とありて、子合と西夜とを一國となせり。即ち南北朝時代に於ける子合國は悉居半と同處にて今の *Karghalik* を指したるものなれば、漢代の子合と混同すべきにあらず。

以上の考證によりて、漢代の子合國が愈々 Asgansal の流域なるに一決せば、無雷蒲鞞、依耐の三國は Yaola 全流域、Raskan Darva の下流域及び此兩域の間に位する溪流域に配當せらるべきなり。若し此考察に誤なしとせば、漢代に於ける西域の南道は莎車 (Yarkand) より西、子合蒲鞞、依耐、無雷、伽舍羅逝を次第に經由して、葱嶺を踰えたるなるべく、而して此等の諸國が漢人に知られたるは、全く此交通の要道に當れるが爲めなるべし。此くて漢時代に於ける莎車南道の氏羌諸國の方位は推定せられたる譯なるが、獨り後漢書に見えたる德若國の所在は不明に屬す。同書^{卷八}の西域傳が記す所によれば、德若國領戸百餘、口六百七十、勝兵三百五十人、東去長史居三千五百里、去洛陽萬二千一百五十里、南與子合相接、其俗皆同とあり、而して今之を漢書^{卷九}の西域傳、依耐國の條に、依耐國王治去長安萬一百五十里、戸一百二十五、口六百五十、勝兵三百五十、東北至都護治所二千七百里、至莎車五百四十里、至無雷五百四十里、北至疏勒六百五十里、南與子合接、俗相與同とある文に對照するに、依耐國は德若國と戸口數、勝兵の員數、子合國との方位、風俗の點に於いて全く同一なるは、大に注意を要すべき事なり。而して後漢書の西域傳には、德若の國名現はれ、依耐の國名見えざれば、依耐と德若とは同一國なりやと云ふに、三國志^{卷三}に引ける魏略には、依耐と億若、德若との二稱を擧げなれば、これまた二國なり。然れども後漢書の德若を億若の誤寫なりとするときは、その古音は Yik-ugak にて、依耐 Yinal と音聲の類似あるを認むべし。因て案ずるに、依耐と億若とは元來同名の異譯なりしを魏略の引用せる西戎傳の著者は之を誤りて二國となし、ならん。

Yarkandより Tashkunganに至る所謂葱嶺南道に當れる子合・蒲犂・依耐(億若)・無雷四國の方位は既に推定を經たれど、こゝに尙考究を要すべく殘されたるは、漢書^{卷九}十六の西域傳に載せたる烏秣國の方位なりとす。今その文を案ずるに、烏秣國王治烏秣城、去長安九千九百五十里、戸四百九十口、二千七百三十三、勝兵七百四十人、東北至都護治所四千八百九十二里、北與子合蒲犁、西與難兜、接山居、田石間、有白草、累石爲室、民接手飲、有驢無牛、其西則有縣度、去陽關五千八百八十八里、去都護治所五千二十里、縣度者石山也、谿谷不通、以繩索相引而度云とあり。更に又た後漢書^{卷八}十八西域傳德若の條を見るに、自皮山、西南經烏秣、涉懸度、歷罽賓六十餘日、行至烏弋山離、地方數千里、時改名排持、復西南馬行百餘日、至條支とあり。漫然此等の記事を通讀すれば、烏秣の東境は葱嶺の東邊に在るが如く、その西界は印度の地に接するが如く、或は葱嶺の南道に觸るゝか如く、或は之と離るゝが如く、茫乎として其所在の捕捉するに苦しまん。之を然れども仔細に此の文を吟味せんか、此の國は長安を去ること九千九百五十里なり。之を既知の諸國に與へたる里數と比較するに、莎車(Yarkand)は長安を去ること九千九百五十里、皮山(Guma)は一萬五十里、于闐(Khotan)は九千六百七十里、疏勒(Kashgar)は九千三百五十里、捐毒(Kestana)は九千八百六十里なり。假令漢書の西域傳に記せる里數に誤算多しとするも、尙之を以て烏秣國が決して絶遠の地に僻在せるにあらざるを察知するに足る。又後漢書^{卷八}十八西域傳皮山國の條に、西南至烏秣國千三百四十里とあるを見ん者は、或は烏秣を以て Gumaの西南 Balistanの北境に位するが如くに思ふべけれど、漢書によれば、皮山は都護の治所を

去る四千二百九十二里、烏秬は四千八百九十二里にして、二國の相距ること僅に六百里に過ぎず、後漢書の文必しも信ずるに足らざるなり。又漢書が都護の治所より烏秬に至る距離として與へたる里數を見るも、此國が皮山(Suma)莎車(Yarkand)を去ること甚だ遠からざるを知るべきが、尙こゝに參考すべきは、余輩が既に述べたるが如く、漢書の西域傳に記されたる邦國は、多く交通の要衝に當れりといふこと是なり。凡そ Tarim 盆地の西南部より西域に通ずるに二道あり。一道は莎車(Yarkand)より Tashkurgan を經て葱嶺に達し、此處より Wakhan の谿谷を通りて Balkh に出づるを莎車大月氏道と呼び、南下して縣度を踰へ Kabul に出づるを莎車屬賓道といふ。又一道は于闐(Khotan)より南行し、Kara Korum 峠を度りて Ladak に達し、此處より Indus 河の流に沿うて西行し、Kashmir の西北界に於いて莎車屬賓路に接續す。若し余輩が漢代の西域地理に關して述べたる前顯の考察法に誤りなしとせば、烏秬國は、此の兩道の中何れかに接觸すべきものと思惟せざるべからず。而して漢書の西域傳が烏秬國の四至に就いて記す所を見るに、東西北の三方には地名を擧げたれど、南方に位する國名を示さず。是れ明かに此國が Kara Korum 峠を經由する南道に接觸せざりしを證するものなり。烏秬國既に Kara Korum 道に當らずとせば、勢ひ此國は葱嶺南道に連絡する要道に當れるものと推斷せざるを得ず。漢書西域傳烏秬國の條を案ずるに、「北與于合蒲犂接」とあれば、此國は Asgansai 河流(于合)の南、Raskam Darya 下流域(蒲犂)の東南に位し、葱嶺南道東端の南方に在りしなり。故に此國を經由して西域に至らんとするものは、必ず此處より西北行し

子合或は蒲犂に至りて葱嶺南道に出てしなるべし。然るに漢書の文によれば、此の國西方に於いて縣度の險を控へ、又難兜國と接せりとあり。若し此文をそのまゝに解釋すれば、烏秣國の西界は印度の西北境に延長し、莎車屬賓道に接觸せりと爲さざるべからず。換言すれば、此國の領土は子合より葱嶺に至る葱嶺南道の南方に連互せりと爲さざるべからず。是れ實際に徴して有り得べき事にあらず、然らば何が故に漢書は烏秣國の西界を定むるに、難兜縣度の如き絶遠の地を挙げたるか。是れ即ち余輩が漢書の西域地理に適用する考察法を待て始めて解説せらるべき問題なり。思ふに當時の漢人が此方面に於ける地理上の知識は、交通の要道に當る處のみに限られしを以て、彼等は葱嶺南道が莎車より葱嶺に至るまでは東西に走るを知れり。而して烏秣國は此の孔道の東部に位する子合の南に當り、難兜縣度は葱嶺の南、莎車屬賓道の東北部に位するを知るのみにて、烏秣と難兜縣度などの間は全く不明に屬せしなり。然れども此等の地が共に同じ緯度の上に在るべきは、机上に於いて推測を施し得べきが故に、西域傳の著者は烏秣の西に難兜縣度を置きて、亦之を怪まざりしなり。以上は兩漢書の文面より、烏秣に就いて推測し得べき限りなるが、尙その方位をして一層明確なりしめんと欲せば、後世この地方を遊歴せる法顯、宋雲等の紀行文に據らざるべからず。是に於てか、余輩は此等の紀行文の中より本問題に關係する部分のみを摘載し、而して之を考證せむとす。

法顯佛國記云、在道一月五日得到于闐中略、慧景、道整、慧達、先發向竭叉國、法顯、欲觀行像、停

三月日略中既過四月行像僧韶一人隨胡道人向蜀賓法顯等進向子合國在道二十五日便到其國國王精進有千餘僧多大乘學住此十五日已於是南行四日入葱嶺山到於摩國安居安
居已山行二十五日到竭叉國與慧景等合值其國王作般遮越師漢言五年大會也請四方沙
門皆來雲集已莊嚴衆坐處懸繪幡蓋作金銀蓮花著僧坐後鋪淨坐具王及群臣如法供養或
一月二月或三月多在春時王作會已復勸諸群臣設供養或一日二日三日五日乃至七日供
養都畢王以所乘馬鞍勒自副使國中貴重臣騎之并諸白氍種々珍重沙門須之物共諸群臣
發願布施衆僧布施僧已還從僧贖其地山寒不生餘穀唯熟麥耳衆僧受歲已其晨輒霜故其
王每請衆僧麥熟然後受歲其國中有佛唾壺以石作之色似佛鉢又有佛一齒其國中人爲佛
齒起塔有千餘僧徒盡小乘學自山以東俗人被服粗類與秦土同亦以氍褐爲異沙門法用轉
勝不可具記其國當葱嶺之中自葱嶺已前草木果實皆異唯竹及石榴甘蔗三物與漢地同耳
從此西行向北天竺在道一月得度葱嶺葱嶺山冬夏有雪又有毒龍若失其意則吐毒風雨雪
飛砂礫石遇此難者萬無一生彼土人即名爲雪山也度嶺已到北天竺始入其地境有一小國
名陀歷。

此一段は法顯の佛國記の中に於て最も解釋に困難なる記事なりとす。随つて文中に見
えたる地名の方位に就いては從來東洋學者の意見甚だ區々にして或は南に置き或は北に
當て法師遊歷の道程常に變移して底止する所なく爲めに後進の學者をして殆んど適從す
る所を知らざらしむ。始め佛國の東洋學者 Rémusat 氏は此文に見えたる竭叉國を以てKa-

shinr と爲し、が、Klaproth 氏はこの考定に満足すること能はざるものあるが故に、更に解釋を與へて曰く、法顯は子合國即ち今の Kake yar より路を南方に取り、Kansha 何の谿谷を上りてその源頭に達し、更に南下して Khandan 及び Chayouk 二河を流に沿うて降り、遂に Ladak に至る。Ladak は文中の于塵に當るべければ、此處より二十五日程に位する竭叉國は Paktistan 或はその附近なるべしと云ひて、竭叉國を以て暗に今の Skardo に擬せり。(Régnusat, Foe Koué Ki. p. 29, note 7.)⁹⁾ Waters 氏は此説に賛同し、竭叉國は Skardo ならんと云ふ (Legge, The Travels of Fa-Hien. p. 22, note 3.) Eitel 氏は之を Ptolemaeus の地理書に記せる Paropamisos 山脈中に住せし Kasiof と云ふと云ふ (Hard-Book of Chinese Buddhism, p. 76) Laidlay 氏は之を Mann の法典に見えたる Khasas Vishnu Purāna に記せる Khasākas と云ふと云ふ (Fa-hien. p. 31) Legge 及び Canningham 二氏は之を Ladak と考定し (The Travels of Fa-hien. p. 18, note 2) Beal 氏は之を聖書の Oshite ならんと推測せり (Buddhist Records of the Western World. Vol. I. p. xiv)。¹⁰⁾ 其後久しく此國の方位に就いて新説を提出せしもの無かりしが、近來に至り Chavannes 氏は従來の諸説と全然その方向を異にせる解釋を下し、之を今の Kashgar なりと考定せり。此説は Stein 氏などの有力なる贊成を得て、近頃嶄新の解説として學界に重きを爲し、その影響する所甚だ大なるが故に、余輩は之に對して批評を試むるに先ち、先づ同氏が如何なる理由によりて此考定をなすに至れるか、今先づその徑路の概要を紹介すべし。

氏は北史^{卷九}の西域傳に「權於摩國故烏托國也其王居烏托城在悉居半西南去代一萬二千

九百七十里」とある文と、渴槃陁國在葱嶺東朱駒波西河經其國東北流有高山夏積霜雪亦事佛道、附於嚙噠とある文とに注目して曰はく、權於摩と渴槃陁とは別國の如くに見られんが、その實必しも然らず。渴槃陁は既に Tule 及び Stein 二氏の説けるが如く今の Tashkungan なり、而して權於摩の稱烏秣の名は、玄奘の西域記に見えたる烏鍛と音聲の著しき類似ありて、別國にあらざるべければ、烏秣の方位も稍、北方にありしと思はる。大清一統志卷三百に權於摩と渴槃陁とは同一國なりと見えれば、漢代の烏秣も魏代の渴槃陁及び權於摩も共に今の Tashkungan なるべく、而して法顯傳の於磨國は於摩國の誤にて、また北史の權於摩國と同名なるべければ、これも Tashkungan なるべしと (Voyage de Song Yun, BEHECO, Tome III, p. 432, note 3)。氏は既に法顯の於磨國(正しくは於摩國)を Tashkungan と考定したれば、此處より二十五日程の處に位する竭叉國は勢ひ他處に求めざるべからざるを以て、遂に之を Kashgar と推定せり。その理由とする所を案ずるに、第一には竭叉の名は Kashgar の古稱佉沙と著しき音聲の類似あり。又第二の理由としては高僧傳第三の釋智猛傳に、猛於奇沙國見佛文睡壺及於此國見佛鉢、光色紫紺四際書然、猛香華供養、頂戴發願鉢、若應能輕能重、既而轉重、力遂不堪、及下案時復不覺重、其道心所應如此とありて、智猛は奇沙國に於いて佛文の睡壺を見たるに、法顯の佛國記には、其國中有佛睡壺以石作之、色似佛鉢とありて、法顯はまた竭叉國に於いて佛の睡壺を見たり。さて竭叉と奇沙とは音聲の酷似する者あれば、一名の異譯なるべく、而して智猛の奇沙國が Kashgar なるべしは、高僧傳第三の鳩摩羅什傳に、什進到氣勒國、頂戴佛鉢、心自念言、鉢形甚大、何其

輕耶、即重不可勝、失聲下之母、問其故、答云、兒心有分別、故鉢有輕重耳、遂停沙勒一年とあるにて證すべければ、法顯の竭叉國も亦 Kashgar なるべしと云ふにあり (Ibid. p. 398—9. Note. 3.)。Chavannes 氏が法顯傳の於摩國を以て北史の權於摩國と同一なりと爲し、於摩は於摩の誤寫なるべしと説きたるは全く正鵠を得たるものにて、杜氏通典卷九十二西戎傳烏耗の條に、後魏又通謂之於摩國とあるにて證すべし。されども氏が大清一統志の文に信賴し、於摩國即ち漢代の烏耗國を以て今の Tashkungan と考定したるには贊同すること能はず。何となれば Tashkungan は Karghalik より殆ど正西に位するに法顯は子合即ち今の Karghalik より於摩國に至るに方向を南に取れり。又 Karghalik より Tashkungan に至るには如何に行程を急ぐとしても尙十日を要すべきに、法顯は子合國より於摩國に至るに、僅に四日を費し、に過ぎざればなり。漢代の烏耗國が葱嶺南道の東部即ち Asgansal の流域に據れる子合國の南に位すべきことは、既に考察を経たれば、法顯が子合國即ち漢代の西夜國 (Karghalik) より南行四日にして於摩國即ち漢の烏耗國に至れりといふ記事は、烏耗國の方位を一層明瞭ならしめたるものなり。而して北史によれば、權於摩國は悉居半、即ち法顯の子合より西南に在りとあれば、法顯の南は西南と解するを穩當とすべし。さて北史に烏耗の一名を權於摩となせども、法顯の佛國記及通典には於摩とあれば、權於摩の權は衍字なるやも知るべからず。若しまた然らずとするも、權の一字は於摩を形容する一語なるべし。果して然らば、余輩は漢代の烏耗國と於摩國との間に、音聲に類似あるを認めずんばあらず。唐代の碩儒顏師古は烏耗の發音に烏

音一加反耗音直加反と注して、之を *Ta-cu-wa-cha* と讀ましたれど、後漢書卷八の西域傳德若國の條には之れを烏耗と書けり。此の如く耗の字には古來魯魚の誤ありとせば、耗の字元來は耗と書かれたりと見るも或は不可なかるべし。而して康熙字典によれば耗字に二音ありて、唐韻呼到切、集韻韻會、正韻虛到切、竝蒿去聲とあるに從へば、その音 *hao* なれど、集韻莫報切音娟とあるによれば、その音 *hao* なり。此の如く耗の字は *hao* の外にまた *huo* の音ありとすれば、烏耗は *wu-huo, pu-huo* とも音じ得べく、法顯、通典の於摩と音聲の一致するを認むべし。もし此の考察に誤なしとせば、漢代の烏耗國と唐代の烏鞞國とは、音聲の上に於いても亦何等關係なきものとなるべし。而して漢代の烏耗國及び法顯の於摩國はまた宋雲の紀行文に見えたる鉢猛城と音聲及方位に於いて融會し得べき點あれば、左に其文を引用すべし。

洛陽伽藍記卷五

云神龜二年七月二十九日、入朱駒波國、人民山居、五穀甚豐、食則麩麥、不立屠

殺、食肉者以自死肉、風俗言音與于闐相似、文字與波羅門同、其國疆界五日行、遲、八月初入漢

盤陀國界、西行六日、登葱嶺山、復西行三日、至鉢猛城、一作鉢三日、至不可依山、其處甚寒、冬夏

積雪、山中有池、毒龍居之、昔有商人、止宿池側、值龍忿怒、呪殺商人、盤陀王聞之、捨王與子向烏

場國、學婆羅門呪、四年之中、盡得其術、還復王位、復呪池龍、龍變爲人、悔過向王、王卽徙葱嶺山、

去此池二千餘里、今日國王十三世祖、自此以西山路、欽側、長坂千里、懸崖萬仞、極天之阻、

實在於斯、太行孟門、匹茲非險、關隴坂方、對此則夷、自發葱嶺、步步漸高、如此四日、乃得

至嶺、依約中下、一作實半天矣、漢盤國正在山頂、自葱嶺已西、水皆流入西海、世人云是天地

之中、人民決水以種、聞中國待雨而種、笑曰、天何由可共斯也、城東有蓋津河、東北流向沙勒惹嶺、高峻不生草木、是時八月天氣已冷、北風驅雁飛雪千里、九月中旬入鉢和國。

法顯及び宋雲が Karghalik より Tashkungan を經て印度に至れりといふに於いては、Stein 氏は余輩と全く意見を同じうするものなれど、その途中の地名の考定に關しては大に解釋を異にす。同氏の考によれば、宋雲は朱駒波即ち今の Karghalik より西方に道を取り、Yarkand 河の南方に起伏する諸山を越えて Raskam Darga に達して、此河を渡りて Tong 村落を過ぎ、Kandar 峠を蹶へて Tashkungan に出たり。而して文中の不可依山は Kandar 山にして、鉢猛城或は鉢盂城は殆ど Tong ならん。氏が不可依山を以て Kandar 山と考定したるには、余輩も同説なれど、鉢盂城は必しも Tong 村となすべからず。尤も氏の此考察は宋雲行程の割合より打算したるものならんが、Karghalik より Tashkungan に至るには多くも十二日を出づべからず。然るに宋雲は之を行くに十六日を費したるを見れば、四五日は故障ありて途中に滞在せりと假定せざるべからず。而して Tong より Tashkungan までは Hedin 氏の紀行によれば、四日程なれば、漢盤陀即ち Tashkungan の東方七日程ある鉢猛城は必しも之を Tong と定むる必要を見ず。法顯が子合國 (Karghalik) より竭叉國 (Tashkungan) に至るには廿八日を費し、が、此道中に於て記載せられたるは於摩の一國のみ。而して宋雲が朱駒波國 (Karghalik) より漢盤陀國 (Tashkungan) に至るには約十六日を要せしが、その間に現はれたる地名は鉢猛城一ヶ處に過ぎざれば、法顯傳の於摩國は宋雲紀行の鉢猛城にあらざるなきか。鉢猛の古音は Par-

mang なり而して宋雲は Wakhan の地名を譯する鉢和 (pat-lwa, pat-kho) の二字を以てし玄奘は vaki's の地名を記すに縛藪 (pak-su, bar-su) の二字を用ゐたるを觀るときは鉢猛城の原名は或は Wa-mang に類似せる發音を有せしにはあらざるか。果して然りとせば宋雲の鉢猛城 (Wa-mang) は漢代の烏秣 (Wa-mao) 法顯傳通典の於摩 (Yi-ma) と音聲の著しき類似あるを認めずんばあらず。

法顯宋雲の紀行によりて漢代の烏秣國魏代の於摩國が Karghalik より Tashkurgan に至る道上にありしと一決せばその方位は果して何れの處に求むべきか。今試に Hedin 氏の地圖を案して Karghalik 道を考ふるに此地より南行して Kuk yar の南に至り Ulg Dawan を越えて Mamuk を過ぎ Tisnab 河を渉り北の大嶺を通りて漢代の子合國に當る Asgansal に出で更に西北行して密爾岱山を踰へ Roskam Darya 河を渡りて Tong に至り Yarkand, Tashkurgan 道即ち葱嶺南道と連絡せしならん。此全道の中に於いて烏秣國の領域に擬せらるべきの地は Mamuk を中心とせる Tisnab 河の流域なるべし。若しも此地を以て烏秣國となすときは北は即ち子合 (Asgansal) 西北は蒲犁 (Roskam Darya の下流域) 東南は皮山 (Yama) に當り漢書が烏秣國の境界として示せるものと略ぼ契合するを見るべし。

法顯宋雲の二法師が Karghalik より Tashkurgan に出でたることは今や全く疑を容るべき餘地なけれど法顯と殆ど時を同じうして于闐を経て罽賓に至れる智猛が果して亦此孔道に由れるや否やに就いては尙考究を要すべきものあれば左に高僧傳中の文を抜載して之が

解釋を試みんとす。

高僧傳^三釋智猛傳云、智猛遂以僞秦弘治六年甲辰之歲(西曆四〇四年)招結同志沙門十有五人、發跡長安、渡河跨谷三十六所、至涼州城、出自陽關西入流沙、凌危履險、有過前傳、遂歷鄯善龜茲于闐諸國、備屬風化、從于闐西南二千里、始登葱嶺、而九人退還、猛與餘伴進行千七百里、至波倫國、同侶竺道嵩、又復無常、將欲闍毗、忽失屍所在、猛悲歎驚異、於是自力而前、與餘四人共度雪山、渡辛頭河、至罽賓國、國有五百羅漢、常往返阿耨達池、有大德羅漢見猛觀喜、諮問方士爲說四天子事、具在猛傳、猛於奇沙國見佛文睡壺、又於此國見佛鉢、光色紫紺、四際畫然、猛香華供養、頂載發願、鉢若有應、能輕能重、既而轉重、力遂不堪、及及下案時、復不覺重、其道心所應如此。

此の紀行によれば、智猛は于闐より西南に二千里を行き、更に千七百里を行きて波倫國(Bal-tistan)に至れり(Chavannes, Voyage de Song yun, p. 431)。故に此の文を卒爾に讀まんものは、智猛は于闐(Kotán)より南に進み、Kara-korum 峠を通過して Ladak に入り、更に西方に轉じて Bal-tistan に達せりと思ふべけれど、此の想像の適中せざる第一の理由は、文中に始登葱嶺の一句の存すること是なり。當時漢人の所謂葱嶺は専ら Pairi を指し、曾て于闐の南方に連互する崑崙山脈を此名稱にて呼べるを聞かず。又第二の理由としては、智猛が奇沙國にて佛の睡壺を目撃したることなりとす。此沙國は法顯の竭叉國と同處にして、釋氏西域記の伽舍羅逝國、水經注の迦舍羅逝國に當り、今の Tashkurgan なり。法顯が竭叉國に目睹したる佛の

唾壺は、智猛が奇沙國にて頂載せる唾壺と同物なりしに相違なし。奇沙と竭又とは音聲に稍、差異あるが如くに思はれんが、水經注に見えたる岐沙谷の名が、亦迦舍遊國の迦舍と同名なりしを考ふれば、奇沙、岐沙、竭又、迦舍、伽舍の諸稱は畢竟同一名の異譯に過ぎざるを悟るべし。奇沙國既に Tashkungan ちりとせば、智猛は此處より南下して、雪山を越え、Gigit に出て、辛頭河を渡りて Kashmir に至れるなり。

法顯傳の於摩國即ち漢代の烏秣國が Karghalik の西南に位する Munk の邊なるべしとは、余輩の彼の國に對する解釋なるが、Chavannes 氏は之に反して Tashkungan に考定したるを以て、此所より二十五日程の處にありと見えたる法顯の竭又國を他處に求むるの必要を感じ、遂に之を今の Kasagar ならんと推斷せり。その理由とする所を見るに、Kasagar は漢代より疏勒或は沙勒と呼ばれし外、亦之を佉沙と稱へしこと、玄奘の西域記によりて徵すべければ、法顯の竭又と玄奘の佉沙とは音聲の上に著しき類似ありといふに在り。然れども Kasagar が佉沙或は迦師の名にて現はれたるは、唐代の記録に始まり、南北朝頃には専ら沙勒、疏勒と呼ばれたるに反して、Tashkungan は當時渴槃陀といはれし外、正しく迦舍王國とも稱せられしを以て之を觀れば、法顯の竭又は寧ろ此の迦舍王國と比較すべきものにて、之を Kasagar の一稱、佉沙と考定すべき必要を見ず。又同氏が第二の理由とする所は、鳩摩羅什が沙勒國にて頂載せる佛鉢が或は重く、或は輕くなれりといふ奇跡の如何にも智猛が奇沙國にて見たる佛鉢に就いての話と符合するものあれば、智猛傳の奇沙國は即ち鳩摩羅什傳の沙勒にて、今

の Kashgar なるべく、而して智猛は奇沙國にて佛の唾壺を見たるに、法顯はまた竭又國にて之を目標したりといへば、智猛傳の奇沙は即ち法顯傳の竭又にて、共に今の Kashgar なるべしといふに在り。然れども佛鉢輕重の奇跡は、固より佛徒の信念上に關する主觀的現象にて、佛鉢自身の有する客觀的事實にあらざれば、此奇跡を以て智猛の奇沙國を鳩摩羅什の沙勒國と推斷するは危険なり。況んや智猛は沙奇國にて、法顯は竭又國にて佛の唾壺を見たるに、鳩摩羅什は沙勒國にてざる事なかりしに於いてをや。且つまた鳩摩羅什と智猛とは全く同時代の人なるに、一は Kashgar を沙勒と書き、一は之を奇沙と記すも如何にや。此の如く Chavannes 氏の提出したる理由は、毫も法顯の竭又國を以て Kashgar 國と爲すに足らざるにも拘はらず、Stein 氏は尙佛國記の文面によりてその Kashgar たるべきを證せんとせり。氏は法顯が竭又國の風物に就て記載せる所は、吾人に知られたる古今の Kashgar に契合すと云はれたれど (Ancient Khotan, p. 60) 余輩は斷じて之を首肯すること能はず。文中に其國當葱嶺之中といひ、又其地山寒不生餘穀、唯熟麥耳の一句を解して、これは Kashgar にて稻を産せず、之を Yarkand 及び Ak-su に仰ぐをいへるなりと云はれたれど、是れ亦強解たるを免かれず。「不生餘穀」の文字はたゞに稻一品を産出せざるの謂にあらざるは勿論なり。況んや魏時代の疏勒國即ち Kashgar が諸穀殊に稻をも産せること、魏書卷百西域傳疏勒の條に、多稻粟菽麥とあるにて證すべきに於いてをや。此く魏時代の疏勒國が五穀を多く産出せる一事を見るも、法顯

の竭又國が Kashgar にあらざるを知るべきと共に、梁書^{卷十四}五諸夷傳渴盤陁國の條に「地宜小麦、資以爲糧」とある記事は益、竭又國の Tashkungan なるを證するものと謂ふべし。

以上考證し來れる所に誤なしとすれば、今の Tashkungan は魏の時に迦舍羅逝、竭又と呼ばれし外、また渴槃陁ともいはれしことなるが、尙爰に考究を要すべきは、此二様の稱呼が同時に行はれたるか、但しは一稱滅して而して後に一稱起れるかの問題なりとす。魏書^{卷四本紀}太延三年癸巳^(西曆四三七年)の條に、龜茲、悅般、焉耆、車師、粟特、疏勒、烏孫、渴槃陁、鄯善諸國各遣使朝獻とあれば、渴槃陁の名は少くとも西曆四百三十七年より魏國に知られたるものなり。而して迦舍羅逝の名を擧げたる水經注の著者酈道元の死亡せるは西曆五百二十七年^(孝昌三年)なれば、彼の二稱は同時に行はれたるものと爲さざるべからず。然れども水經注は迦舍羅逝の名と共に魏代に知られざる無雷、依耐、蒲犁の名を擧げたるを以て之を觀れば、迦舍羅逝の名も當時の史料に記されたるものにあらずして、魏以前の記録に見えたるものにあらざるなきか。酈道元の迦舍羅逝は釋氏西域記の迦舍羅逝と同名なれば、水經注の此の國に關する知識は専ら西域記に據れるものにあらざるなきか。西域記の著者は道安にして、西曆三百八十五年^(東晉太元十年、前秦建元二十一年)に示寂せるが故に、(Chavannes, Voyage de Song Yun, p. 430) 水經注の迦舍羅逝の名が果して道安の西域記に出でたるものならんには、迦舍、竭又の名は酈道元の時代には知られざりしものと推斷せざるべからず。而して竭又の名を示せる法顯、奇沙の稱を擧げたる智猛は、西曆三百九十九年より四百四年までの間に印度に渡れる人なるが故に、

迦舍羅逝の名は少くとも此頃まで行はれたるものなるべく、而して渴槃陁の名が魏書に見えたるは西曆四百三十七年なれば、迦舍の稱が魏の國に絶えたるは、四百四年より四百三十七年の間に在りと爲さざるべからず。

今の *Tashkent* が東晋時代に迦舍羅逝國の名を以て漢人に知られたるは、道安の西域記に此名を擧げたるにて知るべきが、魏志によれば、此國名の中國に傳はりしは、已に三國時代にありしを證すべき形跡あり。そは同書^{十卷}三烏丸鮮卑東夷傳の末尾に附せる魏略の文に見えたる渴石の名是なり。此國は楨中渠沙^{十卷}西夜依耐滿犂億若榆令捐毒休修琴の諸國と共に疏勤に隸屬せり。而して此等の諸國の中方位の不明に屬するは、渴石、琴、榆令の三國なれど、此等の國も亦葱嶺の東側面に位せりと思はるゝは、同書に焉耆の屬國として姑墨、溫、宿尉頭を擧げ、于闐の屬國として戎廬、奸彌、渠勒、皮穴を擧げ、車師の屬國として、且彌、西且彌、單桓、畢陸、蒲陸、烏貧を擧げ、當時西域は方隅に因りて六大勢力に分裂したる状態にありしを察すべきが故に、疎勤の屬國たる渴石も亦葱嶺の東側面に位し、道安の伽舍羅逝、法顯の竭又と同國なるべし。而して渴槃陁國が古來疎勤國と親密の關係に在りしとは、通典^{卷九十三}西戎傳渴槃陁の條に、其王本疎勤人、累代相承以居とあるにて徵すべく、又慧超の往五天竺國傳に、此即舊日王裴星國境、爲王皆叛走投土蕃、然今國界無有百姓、外國人呼云渴飯檀國、漢名葱嶺とありて、唐初渴飯檀國の王家は裴姓なりしを知ると共に、通典^{卷九十二}西戎傳疎勤の條に、唐貞觀中朝貢、今其國王姓裴、並有漢時莎車、捐毒、休循三國之地とあり、唐書^{卷一百一十一}西域傳疎勤の條に、王

姓裴氏、自號阿摩支居迦師城とあれば、疏勒(Kashgar)と渴飯檀(Tashkurgan)とは親姻にて、共に裴姓の國なりしなり(藤田氏慧超天竺國傳註五)然らば何時頃より裴氏はTashkurganに君臨せしか、記錄の徴すべきなければ、的確なることは固より知るに由なけれど、梁書に據れば、中大同元年即ち西曆五百二十九年に梁國に使者を遣はしたる國王は葛沙氏なれば、此王統の滅絶して裴氏の代となれるは、此年より以後にありしと断定せざるべからず。而して葛沙王統の起原は全く不明に屬すれど、宋雲が神龜二年八月即ち西曆五百十九年に漢盤陀國に至れる時の王家は正しく葛沙氏にして、文中に「今日國王十三世祖と見えたり、今假りに一世を三十年と假定して之を逆算するときは、神龜二年即ち西曆五百十九年より三百九十年以前即ち後漢の順帝の永建四年、西曆百二十九年を以て葛沙氏の始りと爲すべし。果して然らば葛沙氏は後漢の中頃に存在したるべければ、三國時代に此國が渴石の名を以て中國に知られたるも決して怪むべきにあらず。

叙上の考證によりてKashgarとTashkurganとが古來親密の關係を有せし事實の闡明したるに於いては、Kashgarの古名たる佉沙迦師とTashkurganの古稱たる渴石竭又とが言語上何等かの連絡あるべしとは、何人も期待する所なるべし。水經注によればTashkurganの谿谷を岐沙谷と呼べり。葛沙渴石竭又の名は此谷名と音聲の類似あれば、此の名は元來此の地の稱呼なりしが、何時しか國姓となり又國號となりしものならん。梁書卷五諸夷傳渴盤十四隨國の條に、出好璣金玉とあれば、Tashkurganには當時玉石を産出せるなり。而してTurk語

にては玉を Kash とすべし。奇沙谷の名は Kash の對音にて、此處に玉を産せしが故に、此の名を得たるなるべし。Kash の名が此の寶石と共に廣く西域諸國に傳播せることは Régnault 氏が其の著 Histoire de la ville de Khotan に於いて説明せる如くなれば、Iran 種に屬すと思はれたる渴石國の名を Turk 語にて解釋するも決して不可なることなかるべし。又 Kashgar の名義は如何と考ふるに Grenard 氏の説によれば、Iran 語にて玉を Kāsh とすべし、Baluch 語にて家市を ghar とすべし、Kashgar は王市の義なるべしとすべし (Mission scientifique dans la Haute Asie, Tome II, p. 35 notev)。更に考ふるに Sighnan 語及び Sarikol 語 (Tashkurgan) にては城市を Xār とすべし、又 Sarnikol 人は Yarkand と Xār とすべし、又其の土人を Xari とすべし、は市人の義なりとすべし、Kashgar の gar は蓋し Xār の轉訛にて都會、城市の義なるべし (Tomasschek, Centralasiatische Studien, II, p. 810)。Kābgar は漢代より隋代に亘りて専ら疏勒、沙勒の名にて漢人に知られしが、唐代に及んでその名始めて記録に現出せり。慧琳の音義に迦師倍黎とあり、慧超の往五天竺國傳に伽師祇離とあるは、正しく Kashgar の對音にて、玄奘西域記の佉沙、唐書西域傳の迦師はその略稱なり。已に前にも引用せるが如く、Wakhan 語にては岩石山岳を ghar, Yaghnob 語にては gor, Bactria 語にては gairi, Sanskrit 語にては giri, Palalvi 語にては gar, Afghan 語にては ghar とすべし、Kashgar の gar は此等の言と同語にて、岩石或は山岳の義なりしやも知るべからず。慧超迦師祇離の祇離、慧琳迦師倍黎の倍黎は Sanskrit は語の giri なるべければ、此等の法師は少くとも Kashgar の gar を岩石或は山岳の義と解したるが如し。さて以上考察せしが如く、迦舍の名が果して岐沙

谷に玉を産するによりて起り、又伽師祇離國の伽師が伽舍と同義なるを思ひ、而して伽舍國と伽師祇離國とか常に密接なる關係にてありしを見れば、伽師祇離 (Kashgar) の名は或は伽舍 (Kash) 國より出でたるにあらざるなきか。伽舍國は東西交通の要道に當りしを以て、その名は獨り漢土に傳はりしのみならず、遠く西域諸國にも聞えしと見え、Mann の法典には之を Kasas とし、Ptolemaeos の地理書には之を Kasia としへり。泰西の學者多く之を Kashgar に擬せんと欲すれど、是れ畢竟今の Tashkurgan が Kasia なりしを知らざるに坐するのみ。

Chavannes, Stein 二氏が Kashgar と考定せし法顯の竭叉國が Tashkurgan, Tashkurgan と推測せし於摩國及び漢書の烏秣國が Tashkurgan の流域に當れりとせば、Chavannes 氏がこの烏秣國と想像せる玄奘の西域記の烏鍛國は、果して何れの處に求むべきか。烏鍛國は佛國記の竭叉國の如く方位の最も曖昧なるものにて、從來學者の間に議論百出し、未だ定説なきを以て、今之が解釋を試むるに先ちて、左に西域記卷十の此國に關する記載を引用せむ。

自此川中(波謎羅川)東南登山履險、路無人里、唯多冰雪、行五百餘里、至塌盤陀國、塌盤陀國周二千餘里、國大都城基大石嶺、背徙多河、中路城東南三百餘里、至大石崖、中路大崖東北踰嶺、履險行二百餘里、至奔攘舍羅唐言葱嶺東岡、四山之中、地方百餘頃、正中墊下、冬夏積雪、風寒飄勁、曠曠焉、鹵稼穡不滋、既無林樹、唯有細草、中路從此東下、葱嶺東岡、登危嶺、越洞谷、谿徑險阻、風雪相繼、行八百餘里、出葱嶺、至烏鍛國。

烏鍛國周千餘里、國大都城周十餘里、南臨徙多河、地土沃壤、稼穡殷盛、林樹鬱茂、花菓具繁多。

出雜玉、則有白玉、黛玉、青玉、氣序和氣、雨順俗寡禮義、人性剛獷、多詭詐、少廉耻、文字語言、少同法沙國、容貌醜弊、衣服皮褐、然能崇信、敬奉佛法、伽藍十餘所、僧徒減千人、習學小乘、教說一切有部、自數百年、王族絕嗣、無別君長、役屬羯盤陀國。

さて其下文を讀みもて行くに、玄奘は烏鐵國より北行五百里にして法沙國(Kashgar)に至り更に東南行五百餘里にして斡旬迦國(Kanghali)に進み、それより東行八百餘里にして罽薩旦那國(Khotan)に達せり。此くの如く玄奘の羯盤陀國(Tashkurgan)を發足して法沙國に到れる大體の方向が北に當り、更に罽薩旦那國に至る大體の方向が東南に走るを以て、從來の註釋家は羯盤陀と法沙との間に位する烏鐵國を只管Tashkurganの北方に求めんと欲せり。例へばJulien氏が單に音聲の類似によりて此國とFerganaのOshに擬せしが如き(Mémoire II. p. 216) *Vivien de Saint Martin*, *Cunningham* 二氏が之をKashgarの南方に位するYangi-Hisahrに當てたるが如き(Mémoire Analytique. p. 417) *Yule* 氏が之をTashkurganの北Yangi-Hisahrの南に位するChihli-Gumbazに推定せるが如き、藤田氏が之をKosarubに置きしが如き(禁超往五天竺國傳箋釋)即ち是なり。然るに近年に至りStein氏は更に此問題を提起し、其傑著Ancient Khotan pp. 454に於いて考證する所あり。其論旨の結歸するは大體に於いてSaint Martin, Cunningham 二氏の如く烏鐵國をYangi-Hisahrに擬するものなれど、その包容する疆域に於いて更に廣大なり。今試にその要旨を紹介せんに、玄奘は羯盤陀の都城(Tashkurgan)より東北二百里即ち二日程に位せる奔懷舍羅に至る。奔懷舍羅は正しく今のChichiklikなり。此處はSarikolよりKashgar, Yangi-Hisahrへ行

くものも又 Yarkand に出てんとするものの必ず經由すべき要衝なれば、玄奘は此處を過ち Chih-Gumbaz, Ighiz yar, Yangi Hisahr 等を經て Kasagar に至りしなるべく、而して烏鐵國は正しく Yangi-Hisahr に當る國なれど、玄奘は多分その都城には至らず、Ighizyar より直に北行して Kasagar に趣きしなるべし。葱嶺の東阿 Mutag Ata 山脈の東麓に位する都會にして烏鐵國に比すべきは、Yangi-Hisahr の外に獨り Yarkand があるのみなれど、此處には漢唐の間さしたる大國ありしと思はれず。唐代の記録に此國の見えたるも、畢竟此の地の著名ならざりし故なるべし。之に反して Yangi-Hisahr は嘗て隆盛を極め、Yarkand は一時その附庸の地なりしとすべし。唐代の烏鐵國は寧ろ此の Yangi-Hisahr に擬すべしなり。尤も玄奘の烏鐵國を Yangi-Hisahr とするところは西域記の文中「南臨徙多河 (Yarkand 河)」とあるは解しがたきに似たれど、此の國の南境は Yarkand に達せしなるべければ、その領土は徙多河即ち今の Yarkand 河に瀕せしなり。又烏鐵國に雜玉を産せしとあるも Yangi-Hisahr に隸屬せし Yarkand にこの寶石を出ししをいへるなるべしと。

Stein 氏は奔攘合羅を以て Tashkungan の東北二百里即ち二日程の處に考定したれど、余輩が西域記并に慈恩寺傳の本文を精讀したる所にては、絶えてさる記事を見出さず。西域記に據れば玄奘は碣盤陁國の都城より東南三百餘里を行きて大石崖に達し、此處より更に東北二百里を行きて奔攘合羅に至れるなり。されば此二百里は都城より奔攘合羅に至る距離にあらずして、都城東南三百餘里の處に位する大石崖よりの距離と知るべし。又此の事を

傳の方には、域東南三百餘里大石壁、中略法師在其國停二十餘日、復東北五日、逢群賊、商侶驚怖、登山、象被逐、溺水死、賊過後、與商人漸進、東下、冒寒履峻、八百餘里、出葱嶺、至烏鍛國、と記せり。今此文と西域記の文とを合せ考ふるに、玄奘は始めTashkunganより東南三百餘里を往きて大石崖の羅漢窟を訪らひ、此處に滞在すること二十五日の後、更に東北二百里を行くに五日を費して奔攘舍羅に至りしなり。此の如く記傳の文を解釋するときは、奔攘舍羅はTashkunganの東北にあらずして、稍、東南に當りしなり。是れ余輩とStein氏とが玄奘のこの行路に就いて大なる差異を生ずる所以なり。奔攘舍羅が果して今の何處に當るべきかは、確言すること能はずれども、其地がTashkunganに對する方向と里數とに考へ、又此地が葱嶺の東岡にして、最も險阻を極めたるに顧るときは、今のKandar山を以て之に擬するを穩當とす。唐書卷二百七西域傳疏勒の條に、喝盤陀或曰漢陀、曰渴館檀、亦謂渴羅陀、由疏勒西南入劍末谷、不忍嶺、六百里、其國也、と見えたる不忍は、Puninと音じ、奔攘舍羅(Punin Salin)の奔攘(Punja)に音聲の類似するものあれば、不忍嶺は亦Kandar山なるべし。而劍末谷は當時Kembatと音じ、渴盤陀(Carbanda, Gam-bah)の略譯ならん。奔攘舍羅が愈々Kandar山に相違なくんば、此處より東方八百里に位する烏鍛國は、今のYarkandを措いて他に之と比すべき地なし。果して然らば、玄奘の取れる道は、莎車より葱嶺を踰へて大月氏安息に出づる余輩の所謂葱嶺南道にして、南北朝の頃盛に往來せられし孔道なり。西域記が奔攘舍羅より烏鍛國に至る道路の險阻なるを記せる文は、また此南道に最もよく適合するものなり。西域水道記によれば、YarkandよりTashkungan

までの距離は八百里なり。又Densy及びYven Hedin二氏の紀行によれば、十日程なれば、今奔攘合羅より烏鍛國に至る八百里の距離を以て、Kandari及びYarkank間の里數と見るも毫も差支なし。殊に烏鍛國の都城が南徒多河に臨むといふ記事は、Yarkand城がYarkand河に瀕するを以てするものにて、烏鍛國のYarkandたる有力の證據なり。Stein氏は此の文を以て烏鍛國の南界がYarkand河に達せるが故なりと爲せど、是れ固より漢文を解せざるよりの誤謬なり。又烏鍛國に雜玉を産せしは、また此國のYarkandたるを證するものなり。Yarkandが古より玉の産地として有名なりしは、漢書^{十卷}西域傳莎車國の條に「出青玉」とあるによりて徵すべく、又近代に至りても尙此寶石を産出せるは、西域見聞錄に之を記載すること甚だ詳細なるにて知るべし。又烏鍛國より北、佉沙國に至る距離五百里の距離は、YarkandよりKashgarに至る距離と相近し、漢書の西域傳によれば、莎車國(Yarkand)と疏勒國(Kashgar)との間は五百六十里とあり、Grand氏の計算によれば、此の二地の距離は大約我が四十五里なりといふ。Yarkandは漢代に莎車といひ、西域南道の要衝に當り、後漢の代には一時霸を西域に争ひし程の國なり。此くも樞要の國が一朝に衰頽して長く歴史上に形跡を絶つが如きは、甚だ奇怪の事にて、決して信ずべからざるなり。されば三國時代に至りても尙依然と存在せしが故に、魏書^{卷三}の東夷傳に引用せる魏略には、莎車の名を掲げたり。南北朝の頃に、此國が渠莎の名にて漢土に知られしは、魏書^{卷二}西域傳に「渠莎國居故莎車城、在子合西北、去代一萬二千九百八十里」とあるにて徵すべし。而して唐代の烏鍛國は即ち此渠莎國と同名にして、その音聲の稍

訛れるものなり。思ふに渠莎の原名はGusa、或はKhusaなりけんが、何時しか轉訛してWusa、Tur-
[Gusa]となりしを、玄奘は之を烏鍛の二字にて譯せるなり。

以上論證し來れる處は、一見甚だ他岐に涉れる如き觀あらんが、要するに葱嶺南道の沿線
を明にし、大月氏の東方に位せる無雷國の方位を推測し、間接に大月氏の東境を、定せんと
試みたるに外ならず。而して無雷國は、此研究によりてTarkand河の南支流たるYach河の流
域にありしと推定し得たれば、其西境に屬するFaskiristanは大月氏の領土と見做さるべか
らず。然れども大月氏は前漢時代に於いて已に此の如く絶遠の地に勢力を發展し得たり
や否や。是は大月氏南境の研究と相待つて推斷せらるべき問題なれば、余輩は次號に於い
て之を考覈せむとす。(未完)